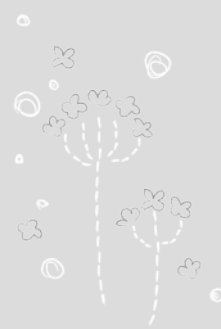


子供の「しつけ」は親の「しつけ」から



子供は親を模倣する

子供のある時代には特に模倣性^{もほうせい}が強く発達するものがあります。が、必ずしも模倣性を有するのは子供だけには限りません。模倣^{もほう}ということは人類の有する諸性質のうち、最も根本的な共通性質の一つでありまして、芸術というものをこの模倣性の発現であると説く人もあります。また、(中略)

人間の模倣性はすべての生命、すべての存在が本来^{じきた}自己^{じこ}一体^{いつたい}であるという根本原理からくるのであって、花という

植物を見てすらも、人間がそれを模倣したくなるのでありますから、人間を見て人間が模倣したくなるのは当然のこととあります。それで、人間は他の人間が何かをやれば自然と模倣したくなるのであります。ですから子供をよくしたいと思う人は、必ず自分自身がよくなければならぬ。い。

(頭注版『生命の實相』第30巻69〜71頁)

形よりもまず心を

子供をよく育てるには親がよくならなければならぬということです。千古^{せんこ}不磨^{ふま}の真理であります。子供は親の延長^{けんじやう}なのですから、親がよくならないでいて、子供にばかり口

小言こごんを言って、その小言こごんによってよくしようと思っても、かえってあまり口小言くちこごんを言われると反抗はんかう心が起こるばかりであります。言葉で小言こごんを言わないで形で示す、生活せいかつで示すということにいたしましたならば、人間は模倣まね性の強いものでありますから、自然と真似まねするようになって良き生活を送るようになってくるのであります。

しかし、本当に子供を善くしたいと思う親は生活の形をよくする以上に、親自身の心をよくするように心がけねばなりません。(中略・たとえばMさんは)子供が食物の好き嫌いを言うとき、みずから反省はんせいなさいますと、慈善事業じぜんじぎょうなどのことで社会婦人として活動かつどうしたために外部よそへ行きたいというふうな時に、良人おととに「行ってまいります」と言うと言い「行かなくても良いよじゃないか」と言いられる。そんなとき言葉では「ハイ」と素直すちにお答えになるけれども、心の中では「あんなに言わなくても、行ったってかまわないのに」と心でわがままを起おこしておった。その心のわがままが子供の食物の好き嫌いとなつて現あらわれておったのだということに気がついて心のわがままをお直しになりましたら、子供の食物の好き嫌きらいいが直ただってしまった。それくらいに親が心に描えがいていることは子供において形かたちに現あらわれると

いうことがあるのであります。それですから、子供を教育するということは親自身を教育してはじめて全き教育ができるわけです。そういうふうふうに単ただに心に描えがくということでも子供が形かたちに模倣まねすることがあるのであります、われわれは子供をよくしようと思おもいますと親が心をよくし、生活をよくしなければならぬのであります。

(頭注版『生命の真相』第30巻72〜73頁)

抑圧よくあつした行為しやうどうの衝動しやうどうは形かたちを代だいえて代償だいしょうする

われわれは、人を導く場合に、恐怖心こふしんを起おこさせるような方法かたによって善よに導ないたところが、かくして為なされる善よは本当ほんとうの善よではないのでありますから、人間を本当ほんとうに善人ぜんじんたらしむることはできないのであります。

恐怖心こふしんを刺激しきして無理むりに自己じこがなそうと思おもっている悪あくを抑おさえますと、一見いちけん、悪あくが消滅しょうめつしたように見みえますけれども、決してその悪あくをなそうとする衝動しやうどうが消滅しょうめつしたのではなくてあります。悪あくをなさんとする衝動しやうどうは押し込められて窒息ちっせきしてはいますが消滅しょうめつしたのでありませんから、何か他の形かたちで現あらわれようとする傾向けんきやうが自然しぜんと出てくるのであります

す。むろん「これをしてはならない」と威嚇しグツと抑えつけてしまいますと、一時はそれをしなくなるかもしれませんが、他のところからいろいろの行為に代償的に現われてくるのであります。そうなりますとせっかく人間を善くしたように見えても決して善くしていない。ひねくれ坊主をこしらえたことになるのであります。ですから強制と威嚇による児童の善導は本当に児童をよくする道ではないということになるのであります。それでは児童を善くしようと思ったならば、どうしたらいいかと申しますと、親自身が心に善を描き、行ないに善を示して、それを模倣さえすれば、児童が自発的に道徳善ができるように仕向けてやるほかはないのであります。

（頭注版『生命の實相』第30巻84～85頁）

児童の神性を尊重して道理を説いて聞かせよ

子供をよくしようとするには、児童を頑是ないわからず屋だと思わないで児童の神性は必ずや善を理解しようと信じて道理を説いて聞かすのが一番良いのであります。道理を説いて聞かすということは小言を言えということではな

いのであります。道理を説き聞かす場合にも、こちらが興奮して棘だったような顔つき、語調をして話すならば、言葉は道理を説いていても、それは叱責となり、かえって反抗心を昂めてなんにもならないのであります。道理を説いて聞かすということは、相手の中に道理が宿っていることを信じて、拜むのであります。子供は神の子であるから「神」すなわち「真理」であり「道理」であるから子供の中には必ず道理が宿っているのであります。子供に宿っているその道理を拜む。拜む気持になって尊敬しつつ優しく道理を説いてきかさねばならない。「あなたは神の子である、善の子である、道理の子である、真理の子である、あなたの中には善があるんだから、善をなすのに極まってい」と、その神性を認めてその子供を拜むような気持ちになって、静かにその宿っている道理を引き出すようにして話しかけるのであります。いくら叱りつけて恐ろしい語調で道理を説いても、それは相手のうちに宿る真理すなわち神なるものを拜んで説くのでありませんから、子供のうちの道理、真理が出てこないのです。同じ道理を説いても、相手を尊敬しつつ説かなければならないのはそのためであります。

（頭注版『生命の實相』第30巻85～86頁）